

Title	『慈悲道場目連報本懺法』と『仏説目連救母經』について(下)
Sub Title	"Cibei daochang Mulian baoben chanfa" and "Foshuo Mulian jiumujing"
Author	渋谷, 誉一郎(Shibuya, Yoichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.86, (2004. 6) ,p.49- 64
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00860001-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『慈悲道場目連報本懺法』と『仏説目連救母經』について(下)

渋谷 誉一郎

(上)

はじめに

一、『目連宝懺』所見「目連救母説話」梗概

二、『救母經』との比較

(1) プロットの比較

附、『目連宝懺』所収「目連説話」本文

(下)

(2) 文体の比較

(3) 反復表現の比較

(4) 定型表現の比較

むすび

(2) 文体の比較

本節では『救母経』と『目連宝懺』の文体について比較する。前節「プロットの比較」において述べたように、『救母経』と『目連宝懺』とは内容に大きな相違はない。それと同様に、文体における特徴も概ね共通しているが、異なる点も認められ、そこに両者の関係を探る手がかりを見出すことができる。以下に『救母経』冒頭部から適当に抜き出し、『目連宝懺』の該当部分と比較する。上段に『救母経』、下段に『目連宝懺』を示す。『救母経』の引用は宮次男氏の公刊版を用い、また前稿では未見であった砂岡和子氏の校録^[1]を参照して文字の誤りや句読に訂正を加えたところがあるが、特に注記としては出していない。次項以下も同。『目連宝懺』引用文のあとの数字は、前稿『目連宝懺』所見「目連救母説話」梗概の順位を示す。

『救母経』

① 昔王舍城中、有一長者、名曰傅相、其家大富、駝驢象馬、遍山盖野、錦綺羅紈、眞珠滿藏、諸頭放債、莫知其數。長者語常含笑、不逆人情、六度之中、常行波羅蜜、長者忽然染病、遂即身亡。

『目連宝懺』

王舍城中、有一長者、名曰傅相、其家大富、象馬駝驢、遍滿山野、錦綺羅紈、眞寶滿藏、常行六度、不逆人情、忽病身亡。(一)

『救母経』は四字六字を基調とした一種の駢儷体であるが、脚韻や平仄は揃えておらず、字数についても五字句や七

字句の混入が少なくない。それに対して『目連宝懺』は、一見して明らかのように四字句を基調としており、脚韻や平仄は整えていないが、字数の破格はごく僅かである。一般にこのような文体は仏典に多く見られ、『救母経』と『目連宝懺』のみの特徴ではないが、両者に認められる相違は自ずとその性格を反映しているであろう。『救母経』は絵図が付された画卷でもあるから、画卷としての性格をも考慮すれば、『救母経』は観るためあるいは観ながら読むための経典である。また、それと同時に経文に焦点を絞れば、信徒や聴衆に説き（語り）聴かせるのに相応しい文体であると言えよう。破格が認められるのは、内容をよりの確に聴衆に理解させようとした表れと解したい。一方、『目連宝懺』は題名の「懺（懺悔、懺法）」が示すように修行や儀礼に用いられる科儀書の体裁をとっており、唱える（念ずる）のを目的とした文体となっている。

内容について、「諸頭放債、莫知其數（各方面に金を幾ら貸しているかわからないほど）」の句は『目連宝懺』には見えない。「放債（金を貸し付ける）」という語は一般に良いイメージではない。『目連宝懺』では傅相の人格紹介にそうしたマイナスイメージを与える要素を省いたと推測される。『救母経』では単に傅相の羽振りの良い資産家ということを強調し、そこに慈悲深さや称賛の意を含めると解すべきであろう。

「六度」は「波羅蜜」の漢訳語で、同義であるから、『救母経』の「六度の中では常に波羅蜜を行う」では内容が重複する。このような同義語彙の重複は、通俗的な文章によく見られるもので、一概に誤りと断ずるわけにはいかない。ここでは傅相の信仰心の厚さの強調か、あるいは時代的・地域的・慣習的な用法の可能性を考慮に入れておきたい。いずれにせよ、この句が内容に破綻を来していないとしても、五字句では破格である。

② 三年服滿……兒欲將錢、出往外國經紀、遣奴益利、

將錢本出。有三千貫文、分作三分、一分留與阿娘、供給門戶。一分留與阿娘、供養三寶、爲爺日設、五百僧齋、兒將一分、往金地國、興生經紀。

三年服滿……意欲出外、經商買賣、娘即聽許、遣奴

益利、運出錢財。有三千貫、分作三分、一分奉母、供給門戶、一分與娘、奉養三寶、爲父設齋、供佛飯僧、將自一分、往於他國、興販經紀。(三)

『救母經』の「出往外國經紀」「一分留與阿娘」を、『目連宝懺』ではそれぞれ「意欲出外、經商買賣」、「一分奉母」「二分與娘」の四字二句に作る。前節ではプロットの比較を通して、『目連宝懺』は『救母經』を改変した可能性を指摘したが、この字数の相違も、『目連宝懺』が『救母經』の文体の不整合を改め、四字句に統一しようとしたものと推測される。本来、整然とした四字句であったものを、『救母經』のように五字や六字に敷衍する必然性は見出せないからである。

③ 慈母見子行去、喚聚奴婢汝來、我今家中大富、若有

三寶師僧、來我門前教化、爲我將棒打煞、莫留性命、將我兒設齋錢、廣買猪羊、鵝鴨鷄犬、餒飼令肥、懸羊柱上、刺血臨盆、縛猪棒打、哀聲未絕、劈腹取心、祭祀鬼神、作諸快樂。

阿娘待子去後、說向奴婢、若有師僧、來我門前、將

棒打逐、以設齋錢、廣買牛羊、鷄豚鵝鴨、餒飼令肥、懸縛柱上、刺血淋盆、哀聲未絕、毛羽脫落、劈腹取心、祭祀鬼神、恣意作樂。(四)

『救母經』の「汝來我今家中大富」は、断句すれば「汝來、我今家中大富」となるが、前後の六字句に揃えて「喚聚奴婢汝來」と解することもできる。いずれにせよ「汝來」は母の言葉である。『目連宝懺』では母の言葉も含めすべて四字句に作る。整つてはいるが、却つて『救母經』の写実性を減じており、母の際立つた性格描写が弱まっている。「爲我將棒打煞、莫留性命（棒で打擲し、生かしておくでない）」は、『目連宝懺』では「將棒打逐（棒で追い立てる）」に作り、「莫留性命」はない。これよつて『救母經』で強調されている慳貪とか無慈悲といった母の性格が減じている。両者を比較すると『目連宝懺』は人物形象の突出するのを避けている傾向が認められる。これは①②でも述べたように、両者の機能や効用に起因するものであり、『目連宝懺』が『救母經』を改変したことを推定せしむる特徴と言えよう。

(3) 反復表現の比較

反復表現とは文体や修辭の特徴であると同時に、神話や伝説等にも顕著に認められる特徴であり、それは文字として定着する以前に口頭表現として行われていた反映とも考えられる。『救母經』と『目連宝懺』はそれぞれ經典と科儀書として、本来的に口頭表現を目的に編まれたものである。したがつて、その本来的な性格によつて反復表現が多く認められるのは納得のゆくところであるが、『救母經』は『目連宝懺』に比べると、反復の頻度と形式とにおいて、いさう顕著である。本節では『救母經』から抽出した反復表現を『目連宝懺』と比較する。まず、『救母經』において注目すべき反復表現を掲げ、次に上に『救母經』、下に『目連宝懺』の該当箇所を示す。ローマ数字は記載順位を示す。

- ① 供養三寶、日設五百僧齋（三宝に供養し、毎日五百の僧齋を設ける）。

I、目連は父の喪が開けると、外国へ商売に旅立つにあたり、母に対して「供養三寶、爲爺日設五百僧齋」を託した。

II、目連が商売を終えて帰国すると、まず下僕の益利を家の様子を窺いに遣る。母は益利を欺く。「我從汝共郎君、行去已後、我在家中、日設五百僧齋」。

III、益利は目連の許に戻り、母の申したとおりに「婆在家毎日設五百僧齋」と報告する。

IV、目連は益利から母の善行を聞くと、母に感謝して、空に向かつて頂礼する。そこへ近隣の人々が出迎えにやつて来て、礼拝の意味を尋ねると、目連は「慚愧阿娘、在家中供養三寶、日設五百僧齋」。

V、目連が帰宅すると、母は「我從汝行去已後（私はおまえが出て行つたあと）、日不爲汝設五百僧齋」ならば、七日を過ぎずに阿鼻大地獄に墜ちると誓う。

VI、母の死後、目連は釈迦のもとで修行し、神通力を得て化樂天宮を觀想すると、父は見つかったが、母は見

I、奉養三寶、爲父設齋、供佛飯僧。

II、我常在家、每設僧齋。

III、婆在家中、每設僧齋。

IV、慚愧阿娘、在家敬佛、日設僧齋。

V、若不爲汝、每設僧齋。

えない。その理由を釈迦に訊ねて「阿娘在生之日、道我日設五百僧齋、死合生化樂天宮、天宮不見、今在何處（母は在世の時、私に毎日五百の僧齋を行ったと話していたので、亡くなれば定めし化樂天宮に生まれたはずだが、天宮には見えぬ、今はどこにおられるのか）」。

Ⅶ、目連が母を尋ねて火盆地獄までやってくる、そこでも母は見つからず、悲しみにくれて叫ぶ。「娘在生之日、道我日設五百僧齋、香花飲食、非不如法、死合生化樂天宮、天宮不見、合在地獄、獄中不見（母は在世の時、毎日五百の齋を設け、香華飲食も法に外れたことはなかったと語っていたので、亡くなればきつと化樂天宮に生まれたはずだが、天宮には見えぬ、地獄に居るかといえぬ、地獄にもいない）」。

Ⅷ、阿鼻地獄にて目連はやつと母との対面を果たした時、目連は「大叫阿娘阿娘、在生之日、道我日設五百僧齋、香花飲食、非不如法、死合生化樂天宮、天宮不見、却

Ⅵ、無し。

Ⅶ、無し。

Ⅷ、大叫阿娘、言在生日、香花飲食、供佛飯僧、一皆如法、死合生天、如何今者、却在地獄。

在地獄（大声で叫んだ。母よ母よ、在世のときは、毎日五百の僧齋を設け、香華飲食は法に外れたことはな
いと語っていたのに、天宮にはおらず、地獄におつた
とは」。

② 將棒打煞、莫留性命、將我兒設齋錢、廣買猪羊、鶯鴨鷄犬、餒飼令肥、懸羊柱上、刺血臨盆、縛猪棒打、哀聲未
絶、劈腹取心、祭祀鬼神、作諸快樂（棒で打ち殺し、息子の遺した齋を設けるための錢で、広く豚や羊や鶯鳥や鴨や
鶏や犬を買い、餌をやつて肥らせ、柱に吊して血を盆に受け、豚を縛つて棒で打ちつけると、悲しい声が絶え間なく
響き、腹を割いて肝を取り出し、鬼神を祀つてさまざまに楽しんだ）。

I、目連が商売のために旅立つと、母は奴婢を呼び申し
つける。僧侶が門前に来たなら、「將棒打煞、莫留性
命、將我兒設齋錢、廣買猪羊、鶯鴨鷄犬、餒飼令肥、
懸羊柱上、刺血臨盆、縛猪棒打、哀聲未絶、劈腹取心、
祭祀鬼神、作諸快樂」。

II、目連が商売から帰国し、近隣の人々が出迎えにやつ

I、將棒打逐、以設齋錢、廣買牛羊、鶯豚鶯鴨、餒飼令
肥、懸縛柱上、刺血淋盆、哀聲未絶、毛羽脱落、劈腹
取心、祭祀鬼神、恣意快樂。

て来て、母の行状を目連に告げる。「汝母從郎君行去後、婆在家中、棒打三師僧、將汝設齋錢、廣買猪羊、鶯鴨鷄犬、餒飼令肥、懸羊柱上、刺血臨盆、縛猪棒打、熱湯煅身、哀聲未絶、劈腹取心、祭祀鬼神、作諸歡樂」。

II、汝母從子、別家去後、凡見僧來、喚婢打逐、將汝齋錢、廣買牛羊、鶯鴨等畜、餒飼令肥、恣行殺害、祭祀鬼神、作諸快樂。

『目連宝懺』は内容は反復しているが、表現に變化を加えて、メリハリを付けている。

③ 匙筋交横、香煙雜亂、椀椀收拾、猶未得了（匙や箸が入り乱れ、香煙が雜然と並び、食器の片付けもまだ終わっていない）。

I、家の様子を窺いに來た益利を偽るため、母は後園にいそぎ幢幡を張り、齋所を設えて益利にその有様を見せると、「匙筋交横、香煙雜亂、椀椀收拾、猶未得了」。

II、益利は目連の許に帰ると、母は毎日五百僧齋を設けていたと報告し、目連がその証を問うと、「正是匙筋交横、香煙雜亂、僧徒並散、收拾猶未得了」がその証であるとした。

I、香煙雜亂、匙筋交横、尚収未了。

II、幡花雜亂、匙筋交横、尚収未了。

④ 死合生化樂天宮、天宮不見。①のVI、VII、VIIIを参照。

⑤ 貧道特來、尋討阿娘、獄主問、誰道阿娘在此、答言、釈迦牟尼佛道娘在此、獄主問師、釈迦牟尼佛是師何眷屬、目連答言、便是本師和尚、我是弟子……問師娘何姓字、爲師往獄中檢簿尋看（貧道は母を探してやってきました）。獄主は問う、誰が母がここにいますと言ったのか。答えて言う、釈迦牟尼佛が母はここに居ると申した。獄主が目連に訊ねる。釈迦牟尼佛は師のいかなる眷屬か。目連は答えて言う、本師和尚であり、私は弟子です……師の母の姓名は何と仰る、師のために獄中へ参り、帳面を調べて差し上げましょう。

I、火盆地獄にやって来た目連と獄主とのやりとりは右のとおり。

II、阿鼻地獄にやって来ると、目連は獄主とまた同じやりとりをする。特來尋討阿娘、獄主問、誰道阿娘在此、目連答言、釈迦牟尼佛道娘在此、釈迦牟尼佛是師何眷屬、目連答言、便是本師和尚、獄主問師、娘何姓字、爲師往獄中檢簿尋看。

I、無し。

II、特來尋母。獄主問師、誰言師母在此。目連答言、釋迦世尊、言母在此。獄主又問、釋迦世尊、是師何親。目連答言、是我本師和尚。獄主問師、娘何姓何名、與師檢簿尋討。

⑥ 見一大地獄、墻高萬丈、黑壁萬重、鐵網交加、蓋覆其上、……叫得千聲、殊無人應（一大地獄が目に入った。堀の高さは万丈、黒壁が幾重にも廻らされ、鉄条網が交錯し、その上を覆っている……幾度となく声を掛けるも、まったく返答がない）。

I、見一大地獄、墻高萬丈、黑壁萬重、鐵網交加、蓋覆其上、……叫得千聲、殊無人應（目連が母を尋ねてやつて来た阿鼻地獄の描写）。

I、見一大地獄、墻壁高厚、鐵網交加、羅覆其上、……從爾叫喚、無出應者。

II、しきりに声を掛けるも誰も応えないので、一つ前の火盆地獄に戻り、獄主に訊ねるときに、右の様子を伝える。

II、無し。

III、火盆地獄の獄主に、阿鼻地獄の門を開くには力量不足と教えられた目連は、釈迦の許に帰り、阿鼻の様子を伝える。

III、無し。

⑦ 汝執我十二鑲錫杖、披我袈裟、掌我鉢盂、致地獄門前、振錫三聲、獄門自開、關鎖自落（汝は我が十二鑲錫杖を執り、我が袈裟をまとい、我が鉢盂を手にして、地獄の門前に至らば、錫杖を三度振るえば、獄門は自然に開き、かんぬきは自然と開くであろう）。

I、釈迦は自らの錫杖と袈裟と鉢盂とを目連に授け、阿鼻地獄の門を開ける手段を教示する。

II、阿鼻地獄に戻った目連は、釈迦の教えの通り「目連披得袈裟、手持錫杖、致地獄門前、振錫三聲」すると、

「獄門自開、關鎖自落」した。

I、執我錫杖、披我袈裟、掌我鉢盂、致獄門前、振錫三聲、獄門自開、關鎖自落。

II、還至獄門、振錫三聲、獄門自開。

⑧ 請諸菩薩、點四十九燈、放諸生命、造立神幡、得娘離餓鬼（諸々の菩薩に請い、四十九の灯明を点じ、諸々の生物を放ち、神幡を造り立てれば、母は餓鬼を離れることができる）。

I、目連の母は阿鼻地獄を離れると、餓鬼地獄に移された。目連が救済の手だてを釈迦に訊ねると、釈迦は「請諸菩薩、點四十九燈、放諸生命、造立神幡、得娘離餓鬼身」と教示する。

II、目連は佛の教えの通り行ふ。「請諸菩薩、放諸生命、造立神幡、點四十九燈、得娘離餓鬼身」。

I、剋肉然點、四十九燈、造立神幡。

II、無し

四十九灯は葉師如来を祀る時には七像を設け、各々に七灯を点すので四十九となるのに由来する。『目連宝懺』の「剋肉然點」は『大方便佛報恩經』等に見える転輪王が婆羅門のために身体の肉を抉って千灯を点した故事に拠る。至

誠の表現を比喩的に強調すると同時に、ここでは供養儀礼の形式を反映している。これは『救母経』に「放諸生命」とある放生供養も同様である。

さきに述べたように、反復表現は口承の反映であるとすれば、その意味では反復の頻出は納得できる。それでは『救母経』においてこの傾向がより突出している特色は如何に理解すべきか。ここでは『救母経』が画卷であることに注目したい。『救母経』はいわゆる上段に絵図を下段に本文を配した上図下文形式であり、絵図と本文がほぼ対応した体裁となっている。『救母経』が画卷であるという観点に立てば、下文は絵図の解説であり、つまり詞書である。詞書であれば画面に相応しい内容が求められる。画面はそれぞれの内容に応じた結果、同じ表現の反復が頻出することになったのである。本文に関しては全体の整合性よりも、それぞれの絵図に対する説明を優先させた結果と考えられる。また、同じ表現が繰り返し出てくるという特徴は、『救母経』は読んだり唱えたりするよりも、図絵を観ることに重点をおいて造られた経緯を示している。

ところで、よく知られているように、『救母経』の刊行された元代には、上図下文形式の書物が盛んに出版されている。この形式は本文が主であり、絵図は一種の装飾か本文の理解を補助する挿画としての役割を担っている存在と思われやすい。しかし本来は絵図が先行して造られ、その後で詞書を下に割り付けたという工程が想定されるであろう⁴。また、絵図を伴う語り物では、いわゆる敦煌変文が先行資料として現存しているが、形式において『救母経』と相通する特徴が少なくない。こうした問題については、稿を改めて考察したい。

振り返って、『目連宝懺』には『救母経』と同様の反復表現が認められながら、頻度において『救母経』より少ないのは、図画を伴わないために、過度な反復を避けて適当な量に削減するという改変が行われたと考えられる。

(4) 定型表現について

ここで取り上げる定型表現は、繰り返し現れるという点で一種の反復表現とも見做せるが、『救母経』『目連宝懺』における内容の中心となる地獄巡りには、一定のパターンがある。目連が母を探してさまざまな地獄を巡るのに、個々の地獄の描写は異なるが、地獄から地獄へと巡歴する過程についてはパターン化された表現になっているのである。それぞれに抽出して示す。

『救母経』 目連次復前行、見一△△地獄、只見南閻浮提衆生、(責め苦の描写)、目連悲哀、問獄主、此地獄衆生、前身作何罪、今受此苦。獄主答師、此是南閻浮提、(在世に犯した罪)、今落弟子手中、只得歡喜忍受。

『目連宝懺』 首至△△地獄へ復次前行、見閻浮人へ見諸罪人、(責め苦の描写)、目連哀問、此獄衆生、前作何罪へ前作何業・宿作何業、今受此苦。獄主答言、因前世時、(在世に犯した罪)、今日果報、只得忍受。△△は地獄の名称、()は挿入される内容、へはバリエーションを示す。

『救母経』がすべて一様の表現パターンを繰り返しているのに対して、『目連宝懺』には若干のバリエーションがある。最初の獄に着いたときは「首至剝確地獄」であり、その後はすべて「復次前行」となっている。また「見閻浮人」を「見諸罪人」に、「前作何罪」を「前作何業」「宿作何業」という具合に言い換える場合がある。文体については『目連宝懺』は四字句を基調とした整った形式になっているが、定型表現については、『救母経』の執拗とも思える繰り返しを避けているのが読みとれる。これも反復表現と同じ理由で改変されたと考えてよいであろう。

三、むすび

本稿（上）では『目連宝懺』に含まれる目連説話について内容を紹介し、『目連救母経』とプロットを比較し、（下）では文体、反復、定型という表現形式を比較することを通して、『目連宝懺』が『救母経』を襲ったものであるのを考察した。これによって、従来中国では逸書とされてきた『救母経』が、何らかの形態によって伝承されていたことを明らかにできた。最後に今後の研究課題と講唱文学研究における意義について少しく述べてむすびとしたい。

本稿で紹介した『目連宝懺』は、中国滞在時に偶然に入手したものであり、書誌についての詳細はほとんど判らない。この点については調査を継続して行い、また同時に蒐集した宝懺類との比較を通して実態の解明に努めたい。また、『目連宝懺』の巻下に引用されている經典は、前稿では『父母恩重経』系統のものと推定したが、『血盆経』系統の仏書である可能性が高い。⁵⁾ 両書は『孟蘭盆経』と関係の深い經典であり、科儀書も少なくない。それらをも視野に入れた考察によって、『目連宝懺』の成立過程を明らかにして行きたい。

次に講唱文学における意義について、今回はほとんど触れることがなかったが、まず変文との関連に注目したい。変文の中には演出に画巻を伴う絵解という演出形態を想定できる作品があるが、『大目乾連冥間救母変文』等との関係において、プロット、ディテール、文体、表現形式、絵図等々に関連して、注目すべき点は少なくない。これらについては稿を改めて論じる予定である。

注

- (1) 砂岡(鈴木)和子「元刊『佛説目連救母經』の口語特徴」、『駒沢女子大学研究紀要』第二号、九五年。
- (2) 『目連宝懺』の四字句を基調とする文体は、卷下に引く經典にも認められ、儀礼に関わる部分を除けば、全体に共通する特徴となっている。
- (3) 「喚聚奴婢汝來、我今家中大富」は、宮氏論文に掲載される写真版では「喚聚奴婢、汝來我今家中大富」と句読を付しているが、「汝來」を前句に繋げ、六字句とすべきであろう。砂岡氏校録では「汝來。」とし、母の言葉としている。
- (4) 上図下文形式について、宮氏論文でも元代の俗文学によく見られる形式と述べておられる(本稿上、注1参照)が、金文京氏は上図下文形式である元刊『三国志平話』は、上の絵図が中心であり、文は絵の解説としての性格が強いことを指摘している(『三国志演義の世界』、東方書店、九三年参照)。また、敦煌文献には上段に佛像図を描き下段に造像記等の文が付されるさまざまな印刷物が含まれている(林聰明『敦煌文書学』第二章 敦煌文書の形態、第二目 仏経類、丁 佛像図類、新文豊出版、九一年等参照)。
- (5) 国際シンポジウム「目連戯とその広がり——東アジアの女人救済と芸能」、慶應義塾大学アジア基層文化研究会主催、二〇〇二年十一月二日、において口頭発表および提出された論文である馬建華「女性的救済——莆仙目連戯與血盆經」において部分的に引用した莆仙流伝本『仏説血盆經』に、『目連宝懺』卷下所引の仏書と等しい内容と表現が認められた。シンポジウム当日、馬氏は原本を持参しておらず、確言は避けたが、可能性の高いことを示唆された。